

# 600字物語001

## 疑う男

作者：エリー

編者：サリー

僕は疑う。全てを疑う。だから確かめる。

出かける前は電気、ガス、水道、鞆のなかみに家の鍵、なんだって何度も確かめる。

モノはいいが、人は厄介だ。嘘を吐くし、毎回必ず答えてくれない。

女たちは揃って僕に愛していると囁く。

僕は聞く。愛するとはなんだ？

ある女は気になってしかたがないと言った。

気になるだけで愛していると言えるのか？

僕はその女に関心がなかった。

女は言った。悲しいと。

僕は愛の確証が欲しい。

そんなある日、とあるパーティーで僕は真紀子に出会った。真紀子は疑わない。素直に微笑む。それ以来、気がつくたびに僕は真紀子のことを考えている。しかし真紀子のことを忘れていた瞬間もある。けれどもすぐに思い出す。これが、もしかして愛なのか。

ある日真紀子とパーティーで再会した。僕は真紀子を見つめた。真紀子は言った。

「なぜ私を見ているの？」

僕はドキッとした。

愛を問うてきた僕が問われたからだ。何か言わなければ。なんと云えよ？

僕には答えの用意がない。焦る。その言葉が唇からこぼれるまで一体何秒かかったのか。

「見つめ返されるのを待っていたんだ」

真紀子は目を見開いてはっきり微笑んだ。

僕は真紀子の反応に幸せを感じたはずだ。

それは真実なのか？